

榎 KaYa

vol.07

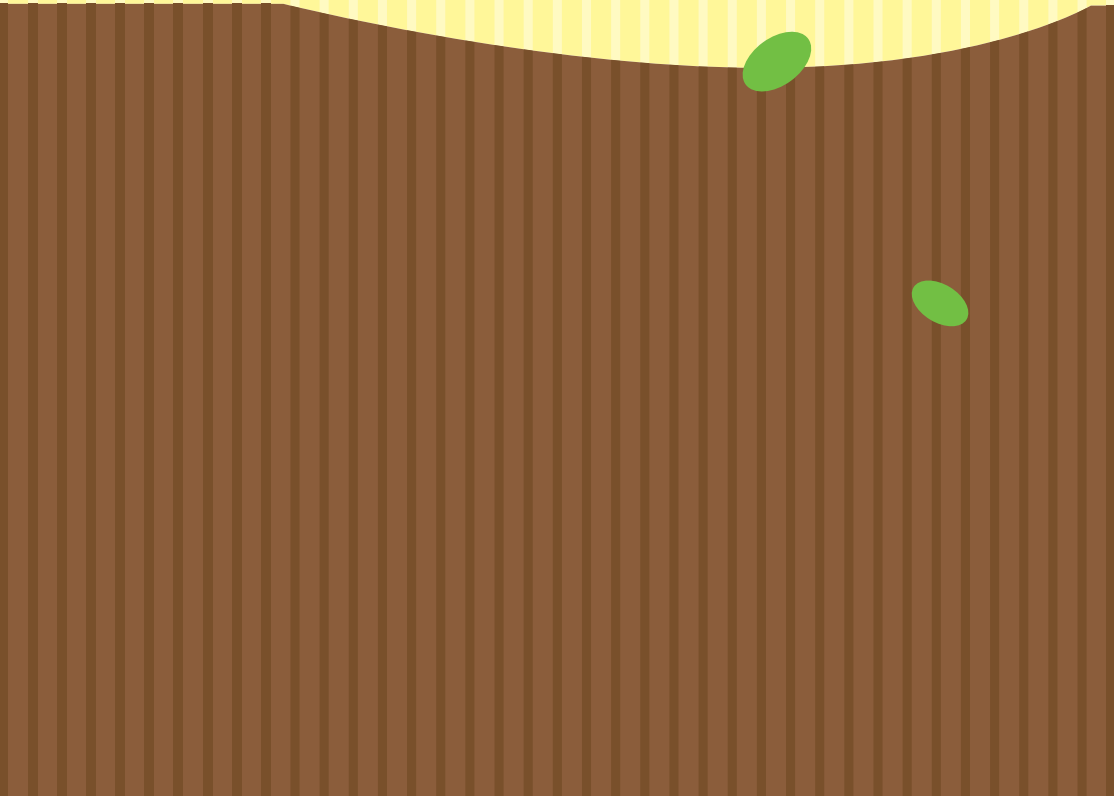
亜細亜大学
国際関係学部編集



KaYa
07
亜細亜大学
国際関係学部

国際関係・多文化
フォトジャーナル

Asia University Faculty of International Relations



国際関係・多文化フォトジャーナル
Faculty of International Relations, Asia University

Contents

04 サブサハラ・アフリカ
内陸国家の経済学
新井 敬夫

14 アメリカ合衆国の祝日と
ベテランズ・デイ
退役軍人の日inサンフランシスコ
伊藤 裕子

22 模する技術の社会空間
— 台北の道観・祠廟にみる実践
大塚 直樹

銅像よもやま話7
30 模範人物の像
高山 陽子

ゼミナール紹介
38 〈韓国〉を通して
「思考力」「行動力」を身に付ける
金 賢貞

フィールドワーク
44 2019年 夏季アメリカ
今野 裕子

学部行事報告
54 2019年度 多文化コミュニケーション学科アジア祭展示
「多文化の乗り物」
新妻 仁一



かや 榎とは



亜細亜大学内のゆうちょ銀行ATMの裏側に記念樹があります。それが榎の木です。この記念樹は、1941（昭和16）年の本学創立当初に植樹されました。先達に敬意を表わしつつ、半世紀以上にわたり本学の歩みを見守ってきた榎とともにグローバル化時代に挑戦してゆこうという国際関係学部の思いが本ジャーナル名の由来です。



亜細亜大学 国際関係学部
〒180-8629 東京都武蔵野市境5-24-10

学部についての詳細は
<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

『榎』はPDFデータでも閲覧いただけます。
※亜細亜大学学術リポジトリから入手できます。



1.首都キガリはうねった丘陵に広がる。

共和国と陸で国境を接している。海に面していないため海港はない。通行可能な国際河川にも接していないため、河港も持たない。世界開発指標から現在の主要な指標（二〇一八年）を見てみよう。人口は一二三〇万人、国土面積二六三〇〇平方キロメートルである。アトラス方式でドル表示をした国民総所得は九六億ドル（五八億ドル＝二〇一〇年）、一人当たりでは七八〇ドルである（PPP方式での換算だとそれぞれ二七・一億ドル、二二・一〇ドルとなる）。経済規模は大きくなく、経済水準も高くはないが、経済（GDP）成長率は八・七パーセント、



3.バイクタクシーは都市住民の移動手段となっている。



2.コンゴ民主共和国との国境付近は交易で賑わう。

ESSAY

サブサハラ・アフリカ 内陸国家の経済学

新井敬夫

はじめに

内陸国あるいは内陸地域の経済発展はどれほど困難なことなのか。ここ数年、ネパール、モンゴル、中国・新疆ウイグル自治区といったユーラシア内陸部で経済発展の諸相を見てきた。内陸で海洋に面していないという要因だけが経済のあり方を規定するわけではないが、どうしても長年研究対象としているマレーシア等の東南アジア海洋世界の経済発展と比べてしまう。

海外との貿易をエンジンとした現代アジアの輸出主導型経済成長にとって、海に面した港とそこに近接する特別な生産区域の開設、さらにそれらを国家全域と結合させる運輸交通インフラの整備が成功の共通要因であった。輸出のためだけでなく原材料、中間財やエネルギー、あるいは消費財などの輸入にも港湾は決定的に重要だった（『樞』vol.1およびvol.4）。

サブサハラ・アフリカ（以下、SSA）の内陸国ルワンダでは植民地統治の

名残、部族間対立、政治権力の不安定性などが複雑に交錯した潜在的に脆弱な社会・国家秩序が長く続き、その顕在化と崩壊によって一九九〇年代にジェノサイドの悲劇が引き起こされた（この点についてはNational Unity and Reconciliation Commission, 2016を参照された）。これによって経済の発展が遅れてしまった。しかし近年、社会の安定という基盤の上に、経済発展への道が開かれている。SSAの内陸という立地条件のもとで、どのような歩みを進めているのだろうか。昨年（二〇一八年）および本年（二〇一九年）行った予備調査において撮影した写真を紹介しつつ、ルワンダの現在について述べる。なお、学術的な分析に関しては別の機会に発表する予定である。

一 ルワンダの概況と経済

ルワンダは、北から時計回りにウガンダ、タンザニア、ブルンジ、コンゴ民主

一人あたりでは五・八パーセントと他の低所得国に比べてかなり高い。SSA全体では経済成長率は二・四パーセント、一人当たり成長率はマイナス〇・三パーセント、また世界全体の低所得グループを見るとそれぞれ四・九パーセントと二・三パーセントであった。低所得国全体として人口増加によって一人当たり経済成長率が抑制されている中で、ルワンダの経済成長は好調、といえるだろう。

二 産業の動向

生産（GDP）の産業別構成比（二〇一八年）は、農業二九パーセント、建設・鉱工業一六パーセント（内製造業六パーセント）、サービス業四七・八パーセントだった。ただし、次の点には留意しておかねばならない。GDPに対する貢献は非農業部門の方が大きい反面、農業就業人口は全就業人口の六七・五パーセント（二〇一四～二〇一六年データ）にも上る。生産額で見た非農業



8. 村落の露天マーケットで売られるキャッサバは1カゴ当たり2000ルワンダフラン(約230円)とのことであった。



7. 野菜の種類も豊富である。



10. 村落の露店で売られるサトウキビは太い。



9. 傾斜地の村落ではバナナが栽培されていた。



13. プロジェクトでは半地下の野菜貯蔵場が推奨される。



12. プロジェクトではプラスチック製の入れ物の使用が推奨される。



11. 現在使われる伝統的な籠は中に入れるトマトを傷つける、とのことであった。



6. キガリのマーケットではバナナやイモ類などが高く積まれる。



5. 平地に広がる水田での農作業は手仕事を中心だった。



4. 南部のキャベツ畑で農作業をおこなっている。

部門の拡大に対して、就業人口では農業部門が依然として卓越する。「生産の非農業化」と「雇用の非農業化」の乖離が大きいということの意味する。

構成比の大きいサービス部門の成長率は八・八パーセントだったが、さらにサブセクターの成長率を見ると、貿易関連サービス一五・二パーセント、運輸一八・三パーセント、ICT関連一七・九パーセントであった。国際会議や展示会等の積極的な誘致をとおして、ホテルやレストラン等のホスピタリティ部門の活性化も見られる、と世界銀行は指摘する。以下、視察やインタビューでの感想も交えながら各生産部門を見ていこう。

三 農業部門

二〇一八年の農業生産は過去一〇年の平均を上回る。好天に恵まれたことが大きな要因である。経済成長率八・六パーセントのうち農業部門の貢献は一・六パーセントであった。昨年(二〇一八

年)と本年(二〇一九年)の調査では農業の現場を視察した。

途上国の貧困削減にとってどのような産業が必要か。最近の研究(ルワンダも対象に含まれる)によると、低所得国の農業の生産性向上は、工業やサービス業などに比べて貧困削減への貢献度が大きい(Yvanic and Martin, 2018)。もっとも、この差は所得水準が上がるにつれ縮小するのだが。現段階で言えば、ルワンダでは就業人口の三分の二を占める農業の生産性の向上が貧困削減に向けた喫緊の課題といえる。

三ー一 食料生産

ルワンダでは、豊富な種類の野菜の作付けを見ることが出来る。大小のマーケットでもキャベツ、ニンジン、トマトなどは高く積まれている。また、他のアフリカ諸国同様イモ類、マメ類が豊富である。一面緑の水田も広がる。ここには、食糧難に苦しむアフリカの姿はな

かった。しかし、生産(技術、体制、経営)、出荷、流通(機構、手段)、販売などの一連のプロセスが十分に整っていないとは言えない。裏の畑で掘ったキャッサバ、サツマイモを村のインフォーマルなマーケットで売っている、という形態の販売も目にする。写真のように入れ物



18.コーヒー豆をこの台の上で、天日干しで乾燥させる。



17.コーヒーの実美しい。

た。テイスティング工房では、専門家の指導を受けつつ、いくつかの協同組合から集荷した数種類のコーヒー豆の香りを嗅ぎ、コーヒーを試飲した(ただし、組合名や銘柄は伏せた上で)。

コーヒーと同様、ルワンダの茶は中国、インド各地、スリランカ(セイロ

は伝統的なカゴである(この問題点は後述)。サトウキビやバナナも同様に売られる。栽培・生産だけでなく全体としての効率化と商業的な農業への進化が必要だと思われた。

二〇一八年の調査では、農業開発に関する援助のプロジェクトも視察した。いくつかのプロジェクトが進んでいる中で、アメリカ国際開発庁(USAID)およびカリフォルニア大学デービス校(UC Davis)の協力のもとで農業の改善に関するプロジェクトが進行中であった。収穫後(post-harvest)の果物や野菜のロスを抑制するための技術改善の研究と実施および普及を目的としている。伝統的な野菜カゴでは、トマトなどの農産物は潰れたり、傷がついたりするので、プラスチック製の導入を推奨しているようだ。また、貯蔵方法の改善に関する研究も進行中であった。プロジェクトの成果が現れるのはいつになるのだろうか(プロジェクトのサイトは

<https://horticulture.ucdavis.edu/country/rwanda>)。

三二 商品作物 — コーヒーと茶 —

コーヒーは元々ルワンダの特産品である。日本のコーヒー豆販売店でも時折同国産の銘柄を見かける。しかし、知名度は同じく東アフリカのエチオピア、タンザニア、ケニア産などに比べ劣っており日本ではブランドとしてはまだまだ浸透していない。作付け、生育、収穫、品質管理等に関しても改善点が指摘されている。詳細は独立行政法人国際協力機構アフリカ部『ルワンダ共和国 コーヒー



14.ルワンダ西部地域に広がる茶畑では労働者が一定間隔で茶を摘む。



19.キガリのコーヒー集荷販売会社では「違いがわかる女性」がテイスティングを行う。

ン)などの知名度に比べると日本では馴染みが薄いと感ずる。しかし、二〇一八年には茶葉の生産量は前年比一二・二パーセントも拡大している。キブ湖の東側を南から北に向かって走行している側と、一面に茶畑が広がる。ある協同組合の茶園を視察し、簡単なインタビューも行った。女性だけでなく男性も茶摘みをする姿は微笑ましかった。

四 工業部門

いわゆる工業化は未だ発展段階にあ

栽培・流通に関する情報収集・確認調査報告書』二〇一四年(オンラインで公開されている)に詳しい。二〇一八年の調査では、同国南部、フィエの農園とキガリのテイスティング工房を視察し



15.男性労働者も手際よく茶を摘む。



16.南部地方のコーヒー園では労働者が肥料を作っていた。

る。製造業は一億三〇〇〇万ドル(二〇〇〇年)から五億六〇〇〇万ドル(二〇一六年)へと拡大した。製造業の業種別付加価値に関する最新のデータがとれるのは二〇〇〇年だが(世界銀行、世界開発指標)、製造業付加価値の七五パーセントは飲料・食料産業、二パーセントは繊維・衣料、化学が六パーセントであった。必ずしも高い技術が必要としない食品加工、飲料生産や繊維部門の生産比率が高いのは当然であるが、その他に海外からの大規模なエネルギー、原材料調達が困難で産業の高度化が進まないことも、このような数値に表れている。しかし、首都キガリでは大規模な工業団地の造成および企業誘致が進んでいる。ここには小規模ながら、まだまだ真新しいドイツ系の自動車アッセンブリー工場および修理工場もある。工業団地全体としてまだ活気があるとは言えないが、どこまで製造業部門が根付くのか、注視したい。

の比率を貧困率とするとルワンダの数値は五五・五パーセント(二〇一六年)となる。また、所得階層下位二〇パーセント人口が獲得する所得割合は、六・〇パーセント(二〇〇六〜二〇一七年)である。比較のため周辺国の同指標を見てみると、ブルンジでは貧困率七一・八パーセント(二〇一三年)、下位二〇パーセントが占める所得は六・九パーセント、コンゴ民主共和国では七六・六パーセント(二〇一二年)と五・五パーセント、ケニア三六・八パーセント(二〇一五年)と六・二パーセント、タンザニアでは四九・一パーセント(二〇一二年)と七・四パーセント、ウガンダでは四一・七パーセント(二〇一六年)と六・一パーセントとなる。

乳幼児死亡率一〇〇〇分の三五(死亡数/一〇〇〇出生あたり、二〇一八年)は南アとほぼ同じで、SSA(一〇〇〇分の七八)や低所得国グループ(一〇〇〇分の六八)の中では良好と言えるし、世界平均(一〇〇〇分の三九)



21.ルワンダで人気の飲料の生産工場の視察はできなかった。



20.キガリの工業団地では造成と企業誘致が進む。

今回の調査では、経済発展初期段階に見られがちな繊維産業一社にてインタビューと視察を行うことができた。近隣から輸入する原綿と化学素材から製糸過程を経て染色・プリント、織、裁断、縫製まで一貫工程を有するこの工場では縫製以前の工程はほぼ完全に機械化されていたが、国内の学校や公務員の制服に仕上げる縫製工程では多くの女性労働者がミシンとともに働いていた。この工程はアジアの工場でかつて何回も見た光景である。残念ながら工場内部の写真は撮らせてもらえなかった。また、キガリ近郊とキブ湖畔で予定していた飲食料産業の視察はできなかった。

五 貧困、所得分配、社会生活

産業の視察のあいまに、大都市キガリおよび中小の都市、村落の社会生活を見てきた。社会生活面についても述べておこう。

国際貧困ライン、つまり一日一・九ドル未満の所得または消費水準にある人口

とも遜色はないが、まだまだ改善の必要がある。平均寿命は男六六歳、七〇歳(二〇一七年)であった。

初等教育達成率(該当する年齢層のうち修学したもの)は七六パーセントで、SSA六九パーセントや低所得国グループ六六パーセントの中では高い(世界平均九〇パーセント)。二〇〜二四歳までの女性のうち、一八歳時までの初婚者の比率(二〇一〜二〇一八年)は六・八

パーセントであった。ウガンダ三四パーセント、ブルンジ一九パーセント、コンゴ民主三七・三パーセント、ケニア二二・九パーセント、タンザニア三〇・五パーセントといった数値と比較すると相対的に早婚ではない(モンゴル五・二パーセント、ネパール三九・五パーセント)。このことは将来の人口規模にも影響する。



22.キガリのマーケットの一角では女性がミシンを使用して衣類を仕立てる。



23.子供は村落の水場で水汲みそっちのけで遊ぶ。

表1 ルワンダと近隣国の貧困指標

	貧困率 (%)	下位20%の得る所得割合 (%)
ルワンダ	55.5	6.0
ウガンダ	41.7	6.1
ケニア	36.8	6.2
タンザニア	49.1	7.4
ブルンジ	71.8	6.9
コンゴ民主共和国	76.6	5.5

出典:世界開発指標 <http://wdi.worldbank.org/table/1.2>

六 対ルワンダ開発協力

いくつかの指標で見たように、ルワンダは依然として貧困が深刻で、十分な所得の機会に恵まれていないため、必然的に被援助大国となっている。表2-1にはルワンダおよびかつて筆者が視察したネパールとモンゴルの援助依存状況を示した。表2-2は近隣諸国との比較である。詳細な分析は省くが、受取額そのものよりも、むしろ国民一人当たり受取額、対GNI、対資本形成、対中央政府支出など、国の経済規模に対しての援助受取額が他国と比べて著しく大きいことがわかる。その理由は第一に貧困が深刻で援助が必要であること、そして第二に援助が有効に作用しそうな政治、社会的環境になっていることであろう。ドナーにとっては、内戦や社会的混乱からの復興のモデルケースにもなるはずだ。

おわりに

サブサハラの内陸国家の貧困削減と経済発展は、今後に残された課題である。

アフリカ内陸であつても鉱物資源に恵まれた地域は相応の運輸・交通インフラが整備される必要性、必然性があつたが、世界市場に何ももたらさない（とみなされた）地域ではそれは不足気味となっている。今後、内陸国の発展のためには、海外および周辺国とのコネクティビティーの確立が大きなカギである。そして輸送力が不十分という条件の下では、「重量と体積をもたない産業」の振興も重要である。ICTなどのサービス産業振興には高度な知識を備えた人材の育成が不可欠である。初等教育の就学率は高くなっているが、高度な知識を備えた人材の育成はそれほど容易ではない。まだまだ、貧困削減と経済発展への模索は続く。



24. 狭い坂道をトラックがゆっくりと走る。坂道の多い内陸国での交通インフラをどうするか。

参考文献

- [1]Ivanic,M and W.Martin, 2018, “Sectoral Productivity Growth and Poverty Reduction: National and Global Impacts”, *World Development*, 109, pp.429-439.
- [2] *Lighting Rwanda, Rwanda Economic Update*, June,2019, Edition No.14, World Bank Group.
- [3] National Unity and Reconciliation Commission, 2016, *History of Rwanda – From the Beginning to the End of the Twentieth Century*, NURC, Kigali
- [4] *Rwanda, Systematic Country Diagnostic*, Document of the World Bank, Report No.138100-RW, June 25, 2019
- [5] 独立行政法人国際協力機構アフリカ部, 2014 年、『ルワンダ共和国 コーヒー栽培・流通に関する情報収集・確認調査報告書』
- [6] 世界銀行、世界開発指標サイト各表 <http://wdi.worldbank.org/tables>

表2-1 内陸国家の援助依存状況

(2017)	政府開発援助受取額(mil.\$)	一人当たり受取額(\$)	対GNI (%)	対粗資本形成 (%)	対中央政府支出 (%)
ルワンダ	1225	102	13.7	57.4	70.9
ネパール	1258	46	5.0	11.1	25.8
モンゴル	764	254	7.8	19.3	28.1

出典：世界開発指標 <http://wdi.worldbank.org/table/6.11>

表2-2 ルワンダ周辺国の援助依存状況

(2017)	政府開発援助受取額(mil.\$)	一人当たり受取額(\$)	対GNI (%)	対粗資本形成 (%)	対中央政府支出 (%)
ウガンダ	2008	49	7.9	32.6	58.0
ケニア	2475	49	3.2	16.7	12.0
タンザニア	2584	47	5.0	14.2	30.8
コンゴ民主共和国	2280	28	6.2	28.0	-
ブルンジ	428	40	13.5	-	-

出典：世界開発指標 <http://wdi.worldbank.org/table/6.11>

表1	合衆国 「連邦の祝日」	公式の休業日
1 ★	ニューイヤーズ・デイ	1月1日
2	マーティン・ルーサー・キングJr. 記念日	1月第3月曜日
3	大統領記念日（ワシントン大統領誕生日）	2月第3月曜日
4	メモリアル・デイ（戦没兵士追悼記念日）	5月最終月曜日
5 ★	独立記念日	7月4日
6 ★	レイバー・デイ（勤労感謝の日）	9月第1月曜日
7	コロンバス・デイ	10月第2月曜日
8 ★	ベテランズ・デイ（退役軍人の日）	11月11日
9 ★	サンクスギビング・デイ（感謝祭）	11月第4木曜日
10 ★	クリスマス	12月25日
(11)	大統領就任式（4年毎の大統領就任年のみ）	1月20日

それぞれの国で祝われる祝祭日は、それぞれの国の固有の歴史や文化や価値観などを如実に表す。一つの国内でも地域や民族集団ごとに固有の祝祭日を定めることもあるが、ナショナル・ホリデイは国がしかるべき手続きにのっとり定められた「国民」全体の祝日であり、国民国家としての「集合的記憶」、あるいは政府がいかにその国の「国民の物語」を語るうとしているかを体現することも多い。

日本にも多くの祝日があり、その数は先進国中最多といわれる。明治初期に設定された伝統的な祝日もあれば、終戦後の占領改革の中で作られた祝日や天皇の代わりを機に設定された祝日、あるいは国民的な行事を記念して設定された祝日などである。それらは「国民国家」として日本の物語を形作る機能を担い、「日本国民」として共有しうる「集合的記憶」の形成を助けてきたといえる。とくに二〇一九年には平成から令和への改元に伴い、一年限りで五月一日の「即位

ESSAY アメリカ合衆国の 祝日と退役軍人の日 in サンフランシスコ 伊藤 裕子

の日」、一〇月二二日の「即位礼正殿の儀」がともに祝日となり、また「国民の祝日に関する法律」によって四月三〇日と五月二日も休日となり、極めて休祝日の多い年となった。こうした祝祭の共有により「国民の物語」も新たな時代へと繋がっていくのだ。

アメリカ合衆国「連邦の祝日」

さて二〇一九年九月から海外研究休暇中の筆者が滞在するアメリカ合衆国では、年に二〇日（四年に一度の大統領就任年は二日）の「連邦政府が定める祝日」（Federal Holiday）がある（表1）。

しかし全米五〇州で同一目的で祝われているのは、一〇日ある「連邦の祝日」のうち★印を付した六日のみである。

一九五〇～六〇年代に黒人指導者としてアメリカの公民権運動を率いたマーティン・ルーサー・キングJr. 牧師（以下MLKと記す）の誕生日（本来の誕生日は一月一五日）を記念する「MLK記念

日」は、レーガン政権時の一九八六年に「連邦の祝日」として制定された。しかし南部を中心に「MLK記念日」と同日もしくは近い日を「州の祝日」（State Holiday）として南北戦争時の英雄を記念したり、MLKの名前を冠せず単に「公民権の日」（Civil Rights Day）とする州もあるなど、人種関係やMLK記念日の扱いをめぐる認識の相違があらわれている。

また二月には初代大統領ジョージ・ワシントン（二月二日）と南北戦争時の第一四代大統領エイブラハム・リンカン（二月二日）の誕生日があり、公式には二つをまとめてワシントンの誕生日に近い二月第三月曜日が「連邦の祝日」としての「大統領の日」（Presidents' Day）に制定されている。しかしイリノイ州やニューヨーク州などリンカン大統領の誕生日を別途祝う州もあれば、「大統領の日」すら祝日にならない州もある。

五月の「メモリアル・デイ」は戦没者

を記念する「連邦の祝日」である。しかしもともと南北戦争の戦没者記念行事として始まったことから、南部諸州の中にはこの日を南部連合（南北戦争時に南部諸州がアメリカ合衆国からの独立を主張して結成した連合）のジェファソン・デービス大統領の誕生日として祝ったり、近い日を「南部連合のメモリアル・デイ」と設定する州もある。

これらはいずれも南北戦争や公民権運動に対する歴史認識の相違がアメリカ国内に依然として存在することを如実に示すものである。

さらに一〇月第二月曜日「コロンバス・デイ」は、クリストファー・コロンバスが一四九二年一〇月一二日にアメリカに到達したことを記念する「連邦の祝日」にもかかわらず、一七にも上る州が祝日に指定していない。代わりにサウスダコタ州では「アメリカ先住民の日」（Native Americans' Day）、その他九州——多くは中西部から西部諸州——では

「先住民の日」(Indigenous People's Day)として祝われている。征服者としてのヨーロッパ人が到達した日を祝うという連邦政府の「語り」に対して、先住民が虐殺され征服された歴史の記憶を重視する州では先住民の視点からの「語り」を主張しているのである。

他にも独立戦争の開始を記念するマサチューセッツ、メイン、ウイスコンシン諸州の「愛国者の日」、テキサスのメキシコからの独立を祝う「テキサス独立記念日」、ワシントンDCの「解放の日」、ユタの「パイオニアの日」、トルーマン大統領の出身地であるミズーリ州の「トルーマンの日」など、独自の記念日を祝日に設定する州も多い。

多様な民族集団・社会集団からの主張

「祝祭日」に関する主張は、「連邦の祝日」への各州からの抵抗にとどまらない。日本町やチャイナタウンなど特定のエスニック・コミュニティではそ

れぞれの伝統やアイデンティティを維持するための行事が行われる。また近年のムスリムやヒンドゥー教徒など非キリスト教徒の急増にもない公的な祝日としての「クリスマス」に異論が出され各宗教特有の祝祭が行われる。筆者の住むベイエリア(サンフランシスコ湾を囲む地域)では、クリスマスの時期のあいさつも「メリー・クリスマス」ではなく「ハッピー・ホリデイ」が多用される。さらには「看護師の日」「図書館職員の日」など、特定の職業に対する敬意を払う日も多く設定されている。そうしたあらゆる記念日を数えたら数百にも上るだろう。連邦や州が設定する祝日以外は学校や企業は休業日にはならないが、連邦政府が定めた「上からのナショナルな記憶の物語」にたいして州や多様な歴史的経験を経てきている各集団が独自の伝統やアイデンティティを主張することもまた容認されているのである。こうした状況に接すると、日本では差別を受けてき

た社会集団 (under-represented group) がそれぞれの語りを表現し、リスベクトされる場はあるのか、ひとつの「ナショナルな物語」が他を抑圧しているのではないか、という疑問を強く抱かされる。

退役軍人の日(ベテランズ・デイ)

——サンフランシスコのパレードから

さて、アメリカの「連邦の祝日」のうち、日本でもあまりなじみがないものの一つが「ベテランズ・デイ」(「退役軍人の日」もしくは「復員軍人の日」)だろう。戦没兵士を追悼する「メモリアル・デイ」に対して、一月一日の「ベテランズ・デイ」は戦地から復員もしくは退役した軍人らの国家への忠誠と奉仕に対して敬意を表し感謝する日である。もとは第一次世界大戦終結(一九一八年一月一日)を祝う「休戦記念日」として始まった。ベテランズ・デイもアメリカの他の多くの祝日同様、月曜日に移動して祝われた時期もあったが、きちん

と敬意を払うために本来の日程で祝うべきであるという退役軍人らの主張により元に戻された。

二〇一九年度のベテランズ・デイは月曜日のため三連休となった。サンフランシスコでは、「サンフランシスコ退役軍人ヘルスケア・システム」(SFVAHCS)の主催で二月一〇日(日)にパレードが行われ、北カリフォルニア各地から集まった約四〇の団体が

フィッシャーマンズ・ワフ(写真1)を大勢の観客のなか行進した。以下その様子を紹介していこう。

先頭でパレードを率いる

騎兵隊と騎手(写真2、3)のあと、退役軍人関連団体、エスニックグループ、ボーイスカウト・ガールスカウトや高校生など、多様なグループが次々に行進を行った。「ゴールデン・ベア」のカリフォルニア州旗を持った退役軍人の

グループ(写真4)、在郷退役軍人会のサンフランシスコ支部(写真5)などは感謝される側の一歩の主役であろう。加えて第



1



2



3



4



5



6



11



12



13

カ市民はサンフランシスコ人口の二〇パーセントを超え、ベイエリアではその存在感は非常に大きい。サンフランシスコ市の現職市議会議員一名のうち三名を中国系が占めるほか、故エド・リー元市長（在職二〇一〇〜二〇一七）も中国系であった。パレード参加者も中国国内で弾圧の対象とされている法輪功や数百名にもなる楽隊の行進など、大規模で圧巻であった（写真11）。ちなみにこれは中華人民共和国に起源をもつ人々の行進である。他方、台湾（中華民国）に起

源をもつ人々のグループの行進もあり（写真12）、政治的配慮がされたといえる。一九世紀末から二〇世紀半ばまで排華移民法によって中国系が排斥された過去、そうした苦難の歴史にもかかわらず第二次世界大戦中に米中が協力して日本と戦ったことが集合的記憶として語られるのだ。ベイエリアで第二のエスニックグループとして急速に人口を増やしているのはフィリピン系である。第二次世界大戦時



7



8



9

二次世界大戦時に使用されたという米軍のジープ（写真6）、その他の軍用車も労いの対象である。また現在の陸軍士官学校の生徒（写真7）も行進に加わった。しかし、これらの軍関係者ではなくむしろそれ以外の参加団体のほうに、「多様性」と「包摂」を重視するベイエリアらしい特徴がみられる。騎手のあとすぐに行進してきたのは日系ボーイスカウトによる楽隊（写真8、9）および日系の退役軍人とその家族である。行進の途中

には司会者が第二次世界大戦中のアメリカ政府による日系人強制収容の歴史に触れ、逆境のなかで彼らがアメリカの「民主主義の勝利」に貢献した功績が称えられるのである。同じく差別や被抑圧の過去が紹介されたのは先住民グループである（写真10）。ヨーロッパ人の入植当初から抑圧や虐殺、強制収容の対象となってきた彼らの歴史を、アメリカの学校では積極的に子どもたちに教育する。そうした歴史的社会的経験にもかかわらず彼らもまた



10

アメリカを守るために奉仕したことに敬意を表するのだ。エスニック・グループとして他に行進に参加したのは、ベイエリアに多い中国系とフィリピン系である。中国系アメリカ

にアメリカの植民地だったフィリピンは、日本に占領されつつも米比合同軍を形成して日本と戦った。「バタアン死の行進」「レイテ戦」「マニラ戦」などの抗日戦争の歴史が「フィリピン系アメリカ人」の記憶として語られ、アメリカ国家の勝利への貢献として認識され称賛される。これらのフィリピン戦の歴史が最近カリフォルニア州の歴史教育に盛り込まれるようになったのは、フィリピン系アメリカ人の運動の成果である。

観客から最も大きな歓声と拍手を浴びていたのは、同性愛者が構成する「フリーダム・バンド」だろう（写真14、15）。カラフルな虹色を乗せた衣装をまとったこの楽隊は、司会者から「世界で初めてのLGBTバンド」と紹介された（本当に世界で初めてかどうかは、筆者は未確認である）。市の人口に占める同性愛者の割合が十五、四パーセントと全米で最も高く、LGBTに対する理解度も非常に高いサンフランシスコならではの

でも特に様々なエスニック集団が集まるこのベイエリアでは、「多様性(Diversity)」と「包摂(Inclusiveness)」がことさらに強調される。そして抑圧され差別を受けた「にもかかわらず」国家に奉仕したマイノリティ集団の苦難と貢献が、社会全体に「認識」され継承されていく。兵士たちが「利益」と「自由」と「民主主義」のために奉仕したという「ナショナルな物語」と、排斥され差別されながらもアメリカのために貢献したという特定の集団の側からの固有の「語り」が統合され、あらたな「ナショナルな物語」が紡ぎ出されていく。「ベテランズ・デイ」のパレードは、そうしたあらたな集合的記憶の醸成装置のようである。

冷戦終結直後の一九九一年に始まった湾岸戦争からアフガニスタン戦争、イラク戦争、そして現在も続くISISとの闘いまで、中東でのアメリカの関与はすでに四半世紀を超えた。中東や南アジアからの移民が増え続けるなか、今後こうした比較的新しいエスニック集団の退役軍人が増え、また「あらたな物語」が紡ぎ出されることになるだろう。

しかし、この国で外国人であり第三者である筆者は、アメリカの集合的記憶の醸成の場に立ち会いつつ、違和感を禁じえなかつた。退役軍人らの「現役中の『奉仕』に敬意を表し感謝する」という表現が様々な人々やメディアによって使われているにもかかわらず、その「奉仕」の中心身についてはどれだけ意識されているのか。その肝心な点に対して無批判なまま、こうしたベテランズ・デイの行事をおして新たな集合的記憶が形成されていくのではないのか。

自国の軍隊が異国の地で何をしているのか、どう思われているのか、そして軍事的プレゼンスが対外的にどのような影響をおよぼしているのか。軍隊を送り出す側の一般市民が、外国軍隊に踏み込まれたり駐留を受け入れる側の一般市民の立場に立って考える機会をほとんど持たないまま、自らの苦難の歴史が集合的

Holidays and Observances in United States in 2019, <https://www.timeanddate.com/holidays/us/>
 人口構成については、“San Francisco, California Population 2019,” World Population Review, <http://worldpopulationreview.com/us-cities/san-francisco-population/> (2019年11月30日参照)。なおヒスパニック系とアフリカ系の市民については本文中で触れなかったが、サンフランシスコ市におけるヒスパニック系の人口比率は現在14%程度(ただし人口調査によって変動)、アフリカ系の人口比率は1970年の13.4%から現在は6.1%へと減少している。いずれの人種・民族グループにおいても、複数の起源を持つ市民も多い。(同HP)



のバンドであるといえる。敬意と感謝の対象となるのは、復員もしくは退役した軍人たちばかりではない。「退役消防士」「退役警官」らも進し拍手を受けた(写真16、17)。とくに一昨年から今年にかけてベイエリアでは毎年大規模な山火事が続いたため、ファイヤーファイター(消防士)への市民の労いの気持ちは強かったであろう。その他、市内の各高校やボーイスカウト、ガールスカウトなども行進をしたり高校のブラスバンドが行進に参加するな

ど、地域を挙げて「ベテランズ・デイ」を祝う様子が見られた。

むすびに——「ベテランズ・デイ」が紡ぎ出す集合的記憶

「戦没兵士・戦没者」の追悼行事を行う国は多数あるだろうが、復員兵・退役兵に敬意と感謝を示す記念日を設定する国はアメリカ合衆国以外にはほとんど見られないのではなからうか。世界で最も大規模な軍隊をもち、建国以来三〇〇を超える対外的軍事介入を行ってきたアメリカの軍事力とその突出した影響力は、つねに国際関係を動かす主要なファクターの一つとなってきた。そうしたアメリカの軍事力を支えるのが一人一人の兵士であり、その役目を終え復員・退役した兵士たちに対し、彼らの国家への「奉仕」をたたえて感謝するのだ。

全米各地で様々な祝い方がある。が、トランプ政権下のアメリカで政治的、社会的分断がますます広がるなか、全米

記憶の中心になっていく。こうしたプロセスはアメリカだけでなく日本を含め多くの国にも見られると思われる。

ESSAY

模する技術の社会空間

——台北の道観・祠廟にみる実践

大塚直樹

はじめに

ベトナムにおける道教の先駆的な研究として大西（二〇〇一）があげられる。ベトナムにおける道教は、大西によれば、中国の支配下にあった北属期に現在のベトナム北部地域に道観がつくられたことにはじまるとされる。さらに九三八年の独立後、とくに陳朝期の一三世紀ごろには福建から来訪した道士との交流がみられ、ベトナム道教に大きな影響をあたえたという。言い換えれば、ベトナムでは、唐・宗時代の道教が重層的に受容されてきた。また、すでに一三世紀頃には、それまでの中国の玄元帝君にかわって土着の土地神が主神となり、信仰形態に変化が生じていたという（大西、二〇〇一）。

周知のようにベトナム社会は「南進」によって漸進的に現在のベトナム中南部に領域を拡大してきた。こうした歴史的過程は、上記にみたベトナム道教の時系列の変化だけでなく移動による空間

的变化、言い換えれば、社会空間的な差異をもたらししてきた。実際、道教だけでなく広く民間信仰に目を向けると、ベトナム各地で地域差がみられる。たとえば、旧暦に基づく故人の命日ないしその前の墓参りに際して、線香・供物ともに故人にささげられる紙銭には、ベトナムの地域間で差異がみられる（大塚、二〇一八）（写真1・2）。

ここでベトナム道教のルーツの一つである中国の福建地方に目を転ずると、当



1. 墓前に供えられた紙製祭祀(2019年5月撮影)。ベトナム南部の事例。



2. 紙銭などを焚く様子(2019年5月撮影)。ベトナム南部の事例。



3. 閩渡宮の全景。正面は前殿である三川殿(2017年1月撮影)



4. 中央が媽祖神(2019年6月撮影)

該地域は台湾や琉球の民間信仰へも深い影響を与えてきた（劉、一九九四／都築、二〇〇一）。そこで、この小稿では台北における紙銭の社会的位置づけを理解し、ベトナムの紙銭祭祀に関する考察の比較視点を得ようと試みる。具体的には台北市内の二つの道観、閩渡宮および青山宮を取り上げ、人びとの参拝の実践を記述してみたい。なお繁体字は原則として漢字で表記している。

道観と神がみ

道観・祠廟には、「○○宮」、「○○廟」、「○○台」などさまざまな呼び名

が存在する。同様にそこに祀られる主祭神は媽祖や閩帝など多種多様である。さらに一般的にみて主祭神以外にも多様な神が祀られている。そこで、ここでは閩渡宮を一事例にして台北の廟の特色ならびにその神がみについて記述する。

閩渡宮は、台北市北投区に位置し、地下鉄（MRT）台北駅から北西に約三分の距離にある。さらに最寄りの閩渡駅からは徒歩二〇分程度を要する。閩渡宮は、地元で有名な道観の一つに数えられる。閩渡宮が発行している公式ハンドブック（陳奕愷、二〇一六）によれば、この廟の歴史的背景が次のように記載されている（以下、断りが無い限り、閩渡宮の歴史に関する記述は本ハンドブックに依拠する）。閩渡宮は、一七二二年（康熙五一年）に前身となる天妃廟が創設されたことにはじまる。この廟は、主祭神として天上聖母媽祖が祀られており、台湾北部最古の媽祖廟といわれている（写真3～5）。一九〇七年には現在



5. 中央の媽祖神に向かって右端には千里眼、左端には順風耳が安置されている(2019年6月撮影)



10. 関渡宮の参拝案内図(2019年6月撮影)

めの具体例を提示する。関渡宮では、廟内に入って右側に参拝・焼香の順序が示されている(写真10)。まず前殿である三川殿の外側にある天公炉(①)、さらに正殿の媽祖殿(②)、観音仏祖殿(③)、文昌帝君殿(④)の順に合計四カ所である(写真11)。前述した公式パンフレットでみたように、少なくとも二〇一七年十一月の調査時点では、正殿以外にも延平郡王三將軍廟(⑤)、福德正殿も参拝経路として廟内の案内図に示

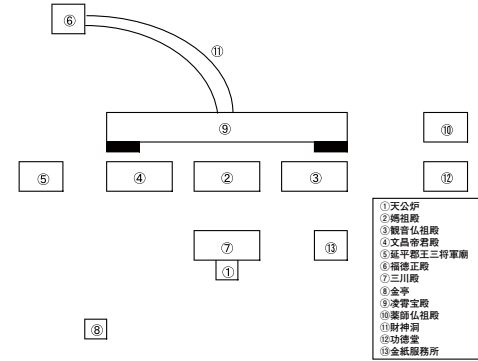


図1 関渡宮の略図。本文中で言及した建造物のみを示した。図中の黒塗り部分は、財神洞への入り口を示す。

の規模にまで建造物が拡大し、関渡宮と改称された。その後、財神洞などが増築されて、近年でも三川殿の修復工事などがおこなわれている(図1参照)。関渡宮には、主祭神の媽祖のほか、多様な神が祀られている。公式ハンドブックに記載された参拝経路に位置する神をあげると、観音仏祖、文昌帝君、延平郡王、福德正神となる(写真6)



12. 2017年11月時点の関渡宮の参拝案内図(2017年11月撮影)



11. 天公炉(2019年6月撮影)

されていた(写真12)。したがって、それ以降に二〇一九年六月現在の四箇所になったと考えられる。案内図の変化にもなつて、正殿には以前六本セットであった線香が現在四本セットになっている。また、これに合わせて、案内板には「正殿の参拝路」と示されていた。ただ



8. 延平郡王。加えて鄭太子・甘輝・万礼の三將軍も祀られている(2019年6月撮影)



7. 文昌帝君(2019年6月撮影)



6. 観音仏祖(2019年6月撮影)



14. 来訪者の参拝風景(2019年6月撮影)



13. 来訪者の参拝風景(2017年3月撮影)

し、延平郡王三將軍廟、福德正殿ともに線香ならびに香炉があり、焼香できるようになっていいる。以下では、二〇一九年六月に調査に基づき、現地の人びとの具体的な参拝の状況を記述する(写真13・14)。調査では、五組の参拝の様態を観察したが、紙

模する技術とその実践

ここでは紙銭のもつ意義を考察するた

9)。主祭神の媽祖は海上活動の守護神から次第に一般的な守護神に据えられるようになった神であり、観音仏祖すなわち観世音菩薩は大乗仏教でとくに崇拜される菩薩である。文昌帝君は文章、学業、科挙受験者の守り神、延平郡王は鄭成功を指し、福德正神は生活空間としての土地を見守る土地神である(c.f. 窪、一九九六/野口・田中編、二〇〇四)。この他にも玉皇上帝や三官大帝、遙池金母など多様な神が祀られている。



9. 福德正神(2019年6月撮影)

幅の都合上、二組のみを記す。なお、事例中の丸数字は、前述の参拝箇所の一（一）内に一致する。

【事例一】一名で参拝にきていた中年男性。

カメラを含めて手荷物をもたない軽装であった。

お布施をした後、金紙と金紙服務所に同時に置かれている菓子を手に取り、媽祖殿前に置かれた供物台へ向かう（写真



15.金紙服務所。左側に線香が置かれている(2019年6月撮影)

15)。両者を①と②に向かって掲げてそれぞれ一札する。その後、金紙服務所に戻り、線香のセットを取り、火をつける。①②③④の順番に参拝する。しかる後、媽祖殿正面の供物台下に安置された虎爺公に屈みこんで参拝する（写真16）。⑤に向かい、参拝をするも焼香はしなかった。

次に正殿裏、左側の階段を利用して、凌霄宝殿五階（主殿に三官大帝ならびに南斗星君および北斗星君が祀られている）に向かい参拝し、その後、正殿裏の右手の階段をくだり、隣の薬師仏祖殿で参拝し、正殿に戻った。いずれも参拝のみで焼香をしていない。正殿に戻ると、①に一札して、自分が置いた金紙を持ち、②に一札をした後、建物を出て右手の金亭（金炉）で金紙を焚く（写真17・18）。金紙が完全に燃焼するまで確認していた。建物右手から入り、③に一札し、次に②に一札し、菓子をとり、載せていた皿を金紙服務所に返却し、再び②



16.虎爺公(2019年6月撮影)



17.金亭(2017年1月撮影)



18.金亭で金紙を燃やす参拝客(2019年6月撮影)

に一札して帰路についた。参拝時間は三〇分程度であった。

【事例二】母親と子ども（男）の親子とおぼしき二名。

母親はハンドバッグのみの軽装、子どもは供物（果物）を持参していた。

まず果物を供物台に置いて、お布施をした後、金紙と菓子一セットを持ち、果物の近くに置く。廟に常設されている供物皿は使用しなかった。線香に火をつけた後、（左右を見回すような感じで）金紙服務所で何かを聞いていた。直前・直後の動きなどから参拝順を聞いていたと推察される。①②③④の順に参拝していた。参拝自体は手短に済ませていた。母親は何かの紙を持って参拝していた。参拝後、子どもが紙を受け取り、再び②で参拝し、香炉の煙の上で紙を回す。③と④でも同じことをおこなった。④の前のクリアボックスに入れた。果物、金紙、菓子を全部持って本来の出口とは

逆の右側から廟を出て、母親が金紙を金亭で燃やし帰路についた。廟での滞在時間は一五分程度であった。

参拝の有り様を観察した後、クリアボックスを確認したところ、ヨコ面に「祝賀 考生金榜題名」の文字が記載されていた（写真19）。また用紙は大学入試の科目通知書であった。通知書によると七月に試験が実施されるようであった。



19.文昌帝君殿前の供物台に置かれたボックス(2019年6月撮影)

おわりに

かつて今和次郎は「人間の行動に関するもの」などを考察する補助学として考現学を提唱した（今、一九八七）。同氏は考現学提言の背景を以下のように述べている。

「それは大正一二年（一九二三年）の震災のときからであった。しばらく私たちは、かの死の都から逃げ出してしまった芸術家と同じようにぼんやりとした。しかし私たちはそのときの東京の土の上じつと立ってみた。そしてそこにみつめなければならぬ事がらの多いのを感じた」（今、一九八七・三六一）。

廃墟のなかで「みつめなければならぬ事がらの多さ」を痛感した今和次郎は、まずもって社会現象を自ら観察する重要さを強調しているといえよう。また、考現学とは、考古学との対比からの発想であり、あくまで補助学であること

も付記している。

「(前略)：考古学における史学と対立されるものとして、考現学においては社会学が当てられるであろう。すなわちそれは社会学の補助学として役だつものだといいたいのである」(今、一九八七…三五九)。

再び今回の参拝実践に目を戻すと、以下の点を指摘しよう。まずすべての事例において、最後に金紙を金亭にて燃やす。ここから、廟参拝において、金紙を神にささげることが重要視されていることがうかがい知れる。なお、関渡宮には、金紙のみが置かれ、銀紙が視認できなかった。青山宮も同様に金紙のみが置かれていた。台北市内の複数の廟を確認した範囲で、銀紙が置かれていたのは台湾省城隍廟のみであった。また、話がやや脇道にそれるが、二〇一九年六月二六日に青山宮に向かったところ、折しも当

該施設に蔡英文總統が訪問していた。この訪問は選挙活動の一環とも推察される。しかしながら、台湾において、道観・祠廟が社会生活に深く根ざしていることが垣間見られた。

次に、当然のことながら、廟への参拝の目的は人それぞれである。しかしながら、あえて大別すると時期が限定されるような目的をもった参拝とそうではなく定期的な参拝とにわかれる。事例二は、合格祈願のための訪問と考えられ、前者に位置づけられる。受験通知書を持参し、学問の神である文昌帝君殿前の供物台に設置されたボックスにそれを投函しただけでなく、参拝時間が相対的に短かったことは、廟を訪れた目的が明確な証左であろう。もちろん祈願成就(合格)を報告するための参拝の可能性も考えられる。台湾では大学入試制度が多様化しており、五月にも合格発表がおこなわれる(日暮・石井、二〇一五：二六―二九)。しかしながら、本事例は、不慣れな雰囲気ですら

しており、初訪問である可能性が高いこと、科目通知書を持参していたことなどから前者ではないかと推察される。どちらにしても特定の目的をもった廟訪問であることを確認できる。

その他の事例でも、幼児の無病息災を目的に訪問したとおぼしき三世代の親子は、関渡宮の西側に隣接する玉女宮(主祭神は玉女娘娘)でも参拝をしていた。娘娘神は女神であり、職能が子どもに関することや治病に関することが多い。これに対して、事例一は後者に位置づけられよう。軽装であったのと同時に非常に慣れた様相で参拝をしていた。もちろん定期的な訪問といっても、参拝の目的があることが推察される。この事例では、天公炉および媽祖殿では、かなり長い時間をかけて参拝していた。他方で、観音佛祖殿や文昌帝君殿では参拝を相対的に簡略化していた。また、媽祖殿正面の供物台下に安置された虎爺公でも参拝している。虎爺公は、廟の守り神であ

り、また土地公などの属神でもある。供物台の下ということもあり、事前の知識がない限り、見つけにくい場所に祀られている。したがって、この事例では、正殿の主祭神の媽祖と虎爺公への参拝を主たる目的としていたと考えられる。

この他にも、前述のように、関渡宮にはさまざまな神が祀られている。一人で訪問していたある中年男性は、五〇分以上をかけて、媽祖が主祭神として祀られた正殿以外にも、福德正殿、財神洞、凌霄宝殿五階、薬師仏祖、功德堂などをめぐってそれぞれで参拝していた。

また、三世代の親子で訪問し、めいめいが順路にとられず自由に参拝し、小さな子どもを廟内で遊ばせているような、いわばレジャー化したような参拝もみられた。

以上から、台北の道観・祠廟における金紙(紙銭)は、人びとの多種多様な願いを収斂させ、それと冥界とをつなぐ役割を果たしていることがわかる。言い換

えれば、紙銭という模する技術は、実社会と冥界とを結びつけ、当該社会で暮らすより多くの人びとに多様な安息を与える媒体になっているといえよう。他方で、複製技術に基づく、いわば安息の大衆化は、オリジナルのモノがもつ価値を変容させ、別の価値観を生み出してきたともとらえうる。今後、ベトナムを事例として、こうしたもう一つの価値観がどのように創り出されるのかを、当該社会の歴史・地理的な文脈に位置づけつつ考察してゆきたい。

付記：二〇一九年六月十三日と十七日の現地調査にあたっては、研究分担者として、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)『「模する」技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究』課題番号19H01395、研究代表者：野口直人(東海大学工学部助教)の助成を受けた。

文献・パンフレット

大塚直樹「ベトナム冥界／冥具考事始め」『樞

——国際関係・多文化フォトジャーナル』vol.5、2018年、4―11ページ。

大西和彦(ベトナムの道観・道士と唐宋道教)遊佐昇、野崎充彦・増尾伸一郎編『アジア諸地域と道教』講座道教第6巻、雄山閣、2001年、110―127ページ。

今和次郎『考現学入門』藤森照信編、筑摩書房(ちくま文庫)、1987年。

窪徳忠『道教の神々』講談社学術文庫、1996年。

陳奕愷『靈山勝境関渡宮——モバイルガイド』今泉百合名訳、財団法人台北市関渡宮、2016年。

都築晶子『琉球と道教琉球と中国の神々』遊佐昇、野崎充彦・増尾伸一郎編『アジア諸地域と道教』講座道教第6巻、雄山閣、2001年、152―176ページ。

日暮トモ子・石井光夫(2015)『台湾の大学入試改革と学力保証』『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』vol.1、23―35ページ。

野口鐵郎・田中文雄編『道教の神々と祭り』大修館書店、2004年。

劉枝萬『台湾の道教と民間信仰』風響社、1994年。



写真2 尊徳生家



写真3 小田原駅の金次郎像



写真4 日光報徳二宮神社

現代日本で、模範人物は？という問いに答えるのは難しいが、戦前であれば答えは二宮金次郎（尊徳）【写真1】となるだろう。

二宮尊徳（一七七七〜一八五六）は、栢山村（現、神奈川県小田原市）に生まれた篤農家である【写真2】。昭和初期に全国の小学校に彼の幼少期を描いた銅

像・石像が設置され、その多くは「負薪読書」といつて薪や柴を背負いながら本を読む姿をしている【写真3】。彼の銅像は主に富山県高岡、石像は愛知県岡崎で制作された。銅像は柴を背負い、石像は薪を背負っている。石では細かい柴を再現するのが難しかったためである。

両親と死別した尊徳は、一六歳でオジ

の家に引き取られ、貧しいながらも働きながら勉強に励む。小田原藩家老・服部家の財政再建を成功させると旗本・宇津家の下野国桜町領（現、栃木県二宮町）に赴任する。疲弊した農村を復興させた尊徳の再建築は報徳仕法と呼ばれ、各地の領主や幕府に採用された。尊徳は七〇歳で今市村（現、日光市）において死去



写真1 掛川駅前の金次郎像



写真6 報徳二宮神社の尊徳像



写真7 報徳二宮神社の金次郎像

前にある金次郎像【写真1】は、新幹線開通を記念して一九八八年、雪聲の像を元に作られた。雪聲の金次郎像は右手に本を持つが、実際のところ、金次郎は右利きだったため【写真6】、その後制作された金次郎像は左手に本を持つ。

金次郎像が学校に設置されるのは

一九三〇年代である。

一九二八年、昭和天皇即位記念として三代目・慶寺丹長が金次郎像を制作し、これを中村直吉が小田原の二宮神社に奉納した。同年九月、名古屋の鶴舞公園で開催された御大典祝奉博覧会に、金次郎の石像が出品された。そして、岡崎の石

材業者と高岡の鋳造業者が金次郎像の制作に取り掛かると、全国の地元の有志者が母校に石像を設置する。「負薪読書」の金次郎像は全国の小学校に置かれたが、一九四三年から始まる金属供出で、二宮神社の銅像【写真7】以外は撤去され、金次郎の石像はそのまま学校に残さ

するまで多くの弟子を指導した【写真4】。

その筆頭が四大門人である。大日本報徳社の初代社長・岡田良一郎、『二宮翁夜話』の著者・福住正兄、『報徳記』の著者・富田高慶、『二宮先生語録』の著者・斎藤高行である。これらの書は、尊徳の思想・報徳思想（至誠・勤労・分度・推讓）を広めただけではなく、彼の「英雄化」にも大きく寄与する。

最初の報徳社・遠江国報徳社は、良一郎の父親・左平治によって、一八七五年、掛川に創設された。その目的は、報徳思想の普及を通じた貧農の救済であった。左平治の後を継いだ良一郎は、一八七七年、掛川に私塾・冀北学舎を開く。ここで学んだ良一郎の息子の良平、一木喜徳郎らは後に文部大臣や宮内大臣となる。

一九二四年、全国約七百の報徳社が合併して大日本報徳社となり、本社が掛川に置かれる【写真5】。

尊徳は、一九〇四年に発行された国定



写真5 大日本報徳社の金次郎像

小学校修身教科書の中に登場した。日本の近代学校制度は一八七二年に始まるが、教科書は各学校でバラバラなものを採用していた。教科書への政府の関与が高まるのは、教育勅語発布（一八九〇年）の後であり、そのころから天皇への忠誠や愛国心を身に付ける終身が重視され

る。なお、当時文部省に罪責していた岡田良平は国定教科書刊行に関わっている。

国定修身教科書は一九四五年まで五回にわたって刊行され、その中で尊徳は明治天皇に次ぐ登場回数を誇った。ところが、初期の国定修身教科書には、「負薪読書」の記述は出てこない。「負薪読書」のイメージは、幸田露伴が、一八九一年、『報徳記』に基づいて子ども向けの本として著した『二宮尊徳翁』に由来する。この中に、「負薪読書」の挿絵が載り、薪（柴）を背負いながら勉強する少年というイメージが形成された。

この挿絵をもとにして鋳金師・岡崎雪聲は一九一〇年、「負薪読書」の金次郎像を制作した。五百体限定で販売されたこの像を、もともと尊徳に深い関心を抱いていた明治天皇が購入し、その後、金次郎像は明治神宮宝物殿に展示された。ただし、この像は、学校を設置場所と見なして制作されたのではなく、各家庭の床の間に置かれることを想定していた。掛川駅



写真11 トラクターに乗る雷鋒

は日本兵に殺され、母親は地主に凌辱された後に自殺したとされる。一九四九年の解放後、雷鋒は湖南省安慶郷人民政府によって無料で小学校に入る。その後、農場や工場でトラクターやブルドーザーの運転手として働く【写真11】。一九六〇年に人民解放軍瀋陽部隊に入り、自動車兵に配置されると、まもなくして、「良い兵士」と称された。一九六二年八月二五日、作業中に撫順で殉職する。

言葉を引用した日記が発見されたことから、彼の模範としての重要性は格段に高まる。一九六三年三月五日、毛沢東は「雷鋒に学ぼう」という運動を提唱し、三月五日は雷鋒精神を学ぶ日となった。社会主義国には「労働英雄」と呼ばれる多様な模範人物がいる。その端緒は一九三五年にソ連で始まったスタハノフ運動で、炭鉱夫アレクセイ・スタハノフが一日あたりの産出量ノルマを大きく越えた石炭を採掘したことに基づく。生産性向

上のための労働英雄顕彰制度は社会主義国に導入され、映画『大理石の男』（一九七七年公開）のモデルになったポーランドのピョートル・オジャンスキや、ユーゴスラビアのアリヤ・シロタノヴィッチなどがその例である。中国共産党は一九三九年からスタハノフ運動を導入して、労働英雄を表彰し始める。ソ連や東欧の労働英雄は主に炭鉱夫などの工場労働者を中心であったが、一九四〇年代の解放区（中国共産党統治



写真12 大慶鉄人記念館の王進喜像



写真9 雷鋒像



写真8 台湾金瓜石の金次郎像



写真10 雷鋒生家

れた。なお、数は少ないが台湾にも金次郎像が残る【写真8】。さて、二宮尊徳のような全国規模の模範人物がいるのは日本特有なのだろうか。実は、中国にも類似した模範人物がいる。それは若くして殉職した雷鋒（一九四〇〜一九六二）【写真9】であり、中国では誰もが知っている人物である。雷鋒は、湖南省長沙市望城県の貧しい農家に生まれた【写真10】。雷鋒の父親

地域)では、土地改革や開墾によって貧農から富農になった人物が労働英雄と見なされた。新中国成立後、この制度は政治的な色合いを強め、党や毛沢東に貢献した人物に勲章が授与されるようになる。

大慶油田開発に携わった王進喜(一九二二〜一九七〇)【写真12】は「鉄人」と呼ばれ、「工業は大慶に学べ」のスローガンとともに全国に知れ渡った。

こうした生産性向上キャンペーンの中で生まれた労働英雄と雷鋒の違いは、雷鋒が「ノルマ越え」という偉業によって模範となったというよりも、よいことをしたために模範と称された。彼は、質素儉約の生活を送り、わずかに貯めた金を寄付するといった善行を欠かさなかった。

雷鋒のイメージは銅像ではなく、ポスターや写真、アニメや絵本を通して全国に普及した。模範人物であった雷鋒は、多くのカメラの前に登場した。典型的な姿は、人民解放軍の制服と防寒帽子(通称、雷鋒帽)に銃を持つものと、トラック

られる。すなわち、貧しい生まれで両親を亡くし、苦勞したにも関わらず、周りの人びとのために働き続けたことである。その行いが、子どもの模範として絵本や教科書に描かれた。戦前の修身教科書に登場した多くの人物が、戦後、姿を消したのに対して尊徳はわずかながらにでも登場し続ける。文化大革命終了後、模範人物や模範村の数々の不正が暴露されたのに対して雷鋒自身には不正は見つからなかった。

現代では、かつてほどの「アイドル性」はないものの、二人の「よい人」というレッテルは生き続けている。その活動場所は道徳教育である。

日本の小学校で二〇一八年に始まった道徳の教科書で幼少期の尊徳(金次郎)が取り上げられている。また、道徳の教科書とともに各地で金次郎像の調査が進んでいる。例えば、神奈川県土地家屋調査士会は、二〇一〇年、『神奈川県二宮金次郎像特集 金次郎MAP』を刊行した(P

の運転席で『毛沢東選集第四巻』を読むものである【写真13】。雷鋒記念館は湖南省長沙、遼寧省瀋陽と撫順、鞍鋼、北京などにあり、必ず雷鋒像が置かれている。

文化大革命が始まる前の雷鋒キャンペーンは、絵本やアニメに描かれた雷鋒お



写真13 撫順雷鋒記念館

DFで閲覧可能)。そして、金次郎像を小学校へ寄贈する例も増えている。

雷鋒の死後五〇年目にあたる二〇二二年、胡錦濤政権は人びとの道徳心や党への忠誠心の向上を目指して「雷鋒に学ぶ運動を深く展開する」ことを提唱した。これは現代版の雷鋒キャンペーンである。北京や上海、長沙などの雷鋒小学校では子どもたちに雷鋒精神を学ぶことを宇促している。また、二〇一八年九月二八日、習近平国家主席が撫順の雷鋒の墓に献花し、記念館を見学した。

今でも映画化・ドラマ化されている点も二人に共通する。日本では二〇一九年、映画『二宮金次郎』が公開され、中国では二〇一三年、ジャック・フリー(胡家華)が雷鋒を演じた映画『青春雷鋒』が公開された。『青春雷鋒』は、かつての「こっぴり」としたプロパガンダ映画ではなく、雷鋒の淡い恋愛に当てた「さっぱり」としたプロパガンダ映画であったが、評判は芳しくなかった。

皆さんの活動を子どもたちが学ぶというものであった【写真14】。一九七〇年代になると、雷鋒が反革命分子を打倒するといった内容になる。一五四センチと小柄だった雷鋒の身体も次第にたくましい兵士のように変わっていった。

尊徳と雷鋒にはいくつかの共通点が見



写真14 撫順雷鋒記念館入口

もう一つの共通点は、思わぬところから揶揄されることである。「負薪読書」の像は、子どもの「歩きスマホを助長させる」と批判された。そこで座って本を読む姿にしたら、今度は仕事中に本を読んでもさぼっていると批判された。雷鋒の場合、キャンペーンは三月の一次的なもので、四月になると彼のことも善行のこともすっかり忘れ去られる。これを揶揄して「雷鋒おじさんは三月に来て四月に去って行く」と言われる。過剰な美談は、常に皮肉を呼び寄せる。そもそも、「模範人物」という言葉が、どこことなく胡散臭いのである。

参考文献

井上章一『ノスタルジック・アイドル二宮金次郎』新宿書房、一九八九年。
武田雅哉「『雷鋒おじさんに学ぼう!』の図像学」韓敏(編)『革命の実践と表象…現代中国への人類的アプローチ』風響社、二〇〇九年。

亜細亜大学国際関係学部多文化コミュニケーション学部の教員として着任して、三年になる。着任前から、「金ゼミ」と称されるゼミナールの目標や内容をどうするか、随分思い悩んだ。

本学科では三年次の「専門ゼミ」と四年次の「総合ゼミ」の担当教員が同じであるため、ゼミ生は卒業までの二年間、つまり、大学時代の半分をゼミナールという授業を通じて同一教員から学ぶことになる。

このスタイルは変えられた。その理由は、次の二つに大別できる。一つは、テキストの内容の難しさにあった。ゼミ生たちは（恐らく）徹夜までして発表の準備をしてきたと思われることがよくあつ

In South Korea, age is measured in bowls of soup

Erin Craig, BBC
Published 20 February 2018



In South Korea, age is counted from the first day of the lunar year. By eating tteokguk during the celebration, Koreans literally mark themselves a year older and wiser.

Dr Soek-ja Yoon fluttered though the demonstration kitchen like a butterfly in her traditional silk dress. The ingredients were already waiting: white ropes of rice cake known as tteok, a dish of thinly sliced beef and tiny bowls of seasoning. Broth simmered on a burner beside her cutting board.

"All Korean food contains symbolism," she told me, expertly slicing the rice cake into circles and fanning them across the table like a magician with a deck of cards. "This tteok is symbolic in three ways. The long rope is for longevity. The slices are shaped like coins for wealth. And the white colour represents purity and a clean start to the new year."



2

ゼミナール
紹介

Seminar
introduction

〈韓国〉を通して 「思考力」「行動力」 を身に付ける

金 賢貞



1

になる。さらに、ゼミナールの名称からも分かるように、ゼミ生は、特定の地域や分野に関する「専門」的かつ「総合」的な知識を身に付けることが求められる。

そこで私は、ゼミ生が韓国に関する専門的な知識を少しでも多く得られることに、最初の金ゼミの目標を据え、韓国の歴史から伝統思想、生活文化に至るまでの幅広いトピックに関する単行本などをテキストにした。ゼミ生は、自分が担当するテキストを読んで発表し、その内容について他のゼミ生や教員からコメントをもらいながらディスカッションする、というのが基本スタイルであった。

しかし、早くもその翌年から金ゼミ



4

ル化、新旧の価値が衝突して起こるフェミニズム運動（「#Me Too」運動）など、変貌する韓国の社会的側面にも及ぶ。

以前のテキストと比べると、文字数二〜三千字程度の短い新聞記事であるため、ゼミ生にとってかなり読みやすくなり、さらに、BBC（イギリスの公共放送局）やThe New York Times（アメリカの新聞社）などの記



5

事であるため、外国の主要メディアが注目する韓国の社会と文化は何か、それらはどういう視点で捉えられているかなどについて、英語表現とともに勉強できる。ゼミ生は、各自関心のある記事（トピック）を選んで順番に発表する。その際は発表資料とともに、テキストとなる英文記事をしっかり読んで日本語訳を作成する。そして、発表が行われた後は、発表者が提示したディスカッション・ポ



6

イントンについて、他のゼミ生たちと一緒に議論する。もちろん、教員もその議論に加わり、コメントしたり補足説明する（写真4〜6）。

金ゼミは「多文化フィールドスタディー（韓国）」（以下「多文化FS」と）連動させて運営している。もちろん、多文化FSの履修が金ゼミの履修条件ではないが、金ゼミ生には多文化FSの履修を強く推奨している。本学に赴

3

Why South Korea is an ideal breeding ground for robots

Ann Babe, BBC
Published 5 December 2017



At Incheon International Airport (ICN), outside South Korea's capital Seoul, a team of congenial staff will help you find your boarding gate or escort you to the nearest lounge. They're well trained, well behaved and quadrupedal to boot – but they're not so good at small talk. That's because they're robots.

The robotic airport guides, developed by Korean tech titan LG Electronics, have been working alongside human employees since the end of July 2017. Standing 1.4m tall, they move autonomously on a wheelbase, display an LCD information screen and navigate using cameras and ultrasonic, laser and edge sensors. They can also recognise voice and process language.



They're not the only robots to be making headlines in South Korea, as the country prepares to host the upcoming 2018 Winter Olympics from 9-25 February in the north-eastern city of Pyeongchang.

たが、いざテキストの内容のポイントや発表者の意見・感想を聞かれると、答えに窮するゼミ生が少なくなかった。つまり、テキスト内の用語や概念などの定義を調べ、内容をまとめるのに精一杯で、

それらが表す韓国の社会的出来事や文化現象の意味などについてはじっくり考え、も一つ一つの理由は、韓国の社会や文化について得た知識を二つの意味でグロー

バル化する必要があると考えたからである。つまり、韓国に関する知識を、簡単でもいいので、英語で説明できる能力と、日本人・韓国人以外の外国人が韓国の社会や文化についてどう捉えているかをも知るといふ意味でのグローバル化である。

今の金ゼミは、次のような内容で運営されている。まず、三年前期には、韓国の社会や文化について取り上げた英字新聞の記事をピックアップし、テキストとして用いている（写真2、3）。そのトピックは、現代韓国社会に受け継がれている伝統文化としての「正月（ソル）」やその食文化、韓国語の「ウリ」と韓国人の集団主義といった、なかなか変化しない文化的要素から、高度経済成長期以後急激に進んだ学歴社会化、教育に対する高い関心と激しい競争によって経済発展を遂げた技術イノベーションの韓国的特徴、「K-POP」という韓国の大衆音楽のグローバル



望ましいが、四年生になってからテーマを変えることもあり得る。ゼミ生は、この時期から小論文のテーマ(目的)や内容(構成・目次)について本格的に考え始め、二度の発表を通して他のゼミ生や教員からコメントをもらいつつ、小論文の形を整えていく。

四年の総合ゼミでは、卒業論文に向けた集中的かつ個人的な指導が行われる。ゼミ生は就職活動で忙しくなり、専門ゼミに比べると、欠席も目立つようになってくる。しかし、小論文を書いた経験に基づいて四年前期にはブレ卒業論文を書いて提出し、教員から添削などの個別指導を受けながら、四年後期に提出する卒業論文に仕上げていく。

金ゼミ生には、韓国についてあれこれ少しずつ知っていると意味での知識ではなく、一般的・表面的な事象の裏側にある物事を読み解く深い思考力を身に付けてほしいと思っている。例えば、「美容整形大国」といわれるようになって



任する前からとても楽しみにしていた多文化FSは二年間中止となっていたが、今年初めて私が担当教員として実施することができた。

金ゼミ生は一人を除き全員が多文化FSに参加したが、六泊七日間(二〇一九年八月六〜二二日)の現地調査の効果はかなり大きい。つまり、韓国の社会や文化について学びながら、自分の問題関心を現地調査のテーマとしてピックアップし、調査の目的を達成するための具体的



な準備や、現地での実際の調査、そこから得られたデータをまとめて分析しつつ、結論を導き出す一連の作業は、メディア報道に影響されながら、偏向されやすい韓国に対する見方や考え方を、ゼミ生自ら集めたリアルなデータや知識を通して主体的なものへと変えていった(写真7〜10)。

さらに、現地では必ずしも計画・予想通りに調査が進むわけではなく、躓いたり、がっかりさせられることもある。そう



いう困難に直面しても気を取り直して調査計画を柔軟に調整し、諦めずに行動し続ける力も、多文化FSを通して培うことができる。金ゼミ生には、教室を離れた現場での学びも体験してほしいと思っている。

三年後期には、多文化FSで得た知識を含めてそれまで学んだ韓国の社会や文化についての知識を活かして小論文作成の指導をする。この小論文は、卒業論文につながるテーマを選定して書くことが

た今の韓国人の自分自身の体に対する考え方と、伝統的な行動規範としての「儒教」と、学歴社会といわれる超競争社会韓国との関連性に関する深い思考である。もちろん、繰り返しになるが、そのような思考力は、現地での体験を通じた学びによって一層深められるものであり、それを可能にする積極的な行動力も培われることを期待している。

写真1 総合ゼミの集合写真
写真2・写真3 テキスト(「ギリス公共放送局BBCのオンライン記事」)
写真4〜写真6 ゼミ内発表の様子
写真7〜写真10 多文化フィールドスタディー(韓国)の様子

2019年 夏季アメリカ フィールドワーク

今野 裕子

はじめに

二〇一四年度に開始された海外フィールドワーク実践を目的とする「多文化フィールドスタディー」も、今年度で六回目を迎えた。従来三〜四年生を対象とした授業であったが、二〇一九年度より二年生にも履修が認められるようになった。今年度は、過去最多の五地域（韓国・中国・フィリピン・ベトナム・アメリカ）でフィールドワークが実施された。

このうちアメリカでの多文化フィールドスタディーは新規科目であり、さらに五ヶ月間のサンディエゴ州立大学・留学プログラムを修了した二年生のみを対象とする授業であった。以下、「多文化フィールドスタディー（アメリカ）」の二〇一九年度実施状況について、詳しく紹介する。

二〇一九年度「多文化フィールドスタディー（アメリカ）」
「多文化フィールドスタディー（アメリカ）」

カ）は、アメリカ西海岸一の大都市ロサンゼルスについて、その人種的多様性の背景にある歴史や文化を学び、さらに現地調査を通じて人々の営みを知ること

目的としている。このためグループでインタビューや参与観察を行い、そこから得られた知識を文献資料からの情報と総合し、現地社会に対する理解を深めてゆくことが求められた。安全面の配慮もあり、調査地や活動内容はあらかじめ教員によって決められていたが、インタビューの質問項目や観察を行う対象に対する視点には学生の独自性が反映された。なお、参加した学生は一四名であった。

他地域に比べ、アメリカの多文化フィールドスタディーには有利な点もあったが、課題もあった。有利な点は、履修する学生が既にアメリカ生活を体験済みであったことである。五ヶ月間の留学を経た学生たちは、語学力のみならず、現地の生活習慣や文化に対する慣れという点においても万全の準備ができて

いたといえよう。一方で、「既にアメリカのことはよく知っている」という認識を抱く学生たちが、いかに新鮮な気持ちでフィールドワークに参加し、教員が設計したメニューの範囲内でどれほど主体性を発揮できるのか、という挑戦もあった。しかし、生活体験から得られるアメリカ理解は歴史や文化の勉強を通じて得られる知識とは別物であったこと、また学生自身が旺盛な好奇心と行動力を発揮してくれたこともあり、このような課題はある程度解決することができた。

事前準備

フィールドワークの実施にあたり、学生は現地社会に対する基礎的な知識を得るための文献講読を行った後、グループに分かれ、移民に対するインタビュー調査のテーマ決めと質問項目の設定を行った。

文献講読では、アメリカの簡単な通史、移民の歴史、ロサンゼルス郡やその周辺の人種構成、日系アメリカ人の歴



サンディエゴ州立大学にて



フィールドノート

史、インタビューを行う対象であるクロアチア系コミュニティの歴史、参与観察を行う予定の東本願寺別院やリトルトーキョーの概要について、インターネットや書籍、小冊子などから得られる基本情報の確認を行った。

インタビューの調査テーマと質問項目の設定については、学生が三〜四人のグループに分かれて作業を行ったが、言語の習得や仕事・生活面における苦労など、アメリカで移民の直面する問題には想像力を働かせやすかったとみえ、比較的困難もなくグループワークを進めていった。また、留学を経験していたため、質問を英文で作成することに対する抵抗も少なかったようだ。

上記の準備を済ませたのち、ロサンゼルスでのフィールドワーク開始直前の七月二四日には、サンディエゴ州立大学のアメリカン・ランゲージ・インスティテュート（語学センター）協力のもと、一日授業を行った。この授業では、インタ

●二日目 コアな移民の歴史に触れる
(七月二六日)
フィールドワーク二日目には、ロサンゼルスダウンタウンから車で三〇分ほど南下したところにある、サンペドロ地区及びターミナル島を訪れた。
サンペドロ地区にはクロアチア出身の移民が多く住む。調査では、彼らが結成したエスニック団体、クロアチアン・アメ

氏とはその後、一〇〇年以上の歴史を持つグランド・セントラル・マーケットまで一緒に移動し、夕食をともにした。



グランド・セントラル・マーケット

リカン・クラブの集会所を訪れ、そこに遊びに来る移民たちにインタビュウを行った。クロアチアは東ヨーロッパに位置する国である。サンペドロには第二次世界大戦前からクロアチア系移民のコミュニティが存在したが、現在のクラブのメンバーになっているのはほとんどが戦後の移住者である。かつてクロアチアがユーゴスラビア社会主義連邦共和国の一部であった時代に、政治的自由を求めてアメリカへ渡ってきた人々が多い。学生は、移民としての経験に関するさまざまな質問をグループごとに用意したインタビューに臨んだが、対象者として想定していた高齢のクロアチア系移民男性の多くが、予想外に英語でのインタビュウに抵抗を覚え協力を拒んだことから、実質的にはごく少数の人々からしか聞き取りを行えなかった。それでも、難民キャンプを経てアメリカへやって来た経緯や、就業体験についてなど、興味深い話を聞き出すことができたようだ。



クロアチアン・アメリカン・クラブの集会所

午後にはかつて日本人漁村の存在したターミナル島に渡った。第二次世界大戦前までおもに和歌山県から渡航した日本人移民が、ツナ缶やイワシ缶の原料となる魚を水揚げする港があり、日本人と島生まれの日系二世のみが居住する一画があった。しかし、戦争によって住民は立ち退きを余儀なくされ、漁村はその短い歴史を終える。現在では、神社の鳥居のレプリカや漁師像、漁村の歴史を説明したプレートにその痕跡を見ることができるようである。

ビュ調査に関する最終確認を行ったほか、追加文献の講読と、調査地の一つであるターミナル島の日系人コミュニティに関する映像鑑賞を行った。さらに、学生一人一人に、現地で気が付いたことを細かく記録するためのフィールドノートを渡したが、実際にこれを用いてサンディエゴ州立大学の構内でフィールドワークの練習を行い、成果を発表するという実習も行った。ノートの使用は学生のフィールドワークに対するモチベーション向上に一役買ったもようである。ロサンゼルスでのフィールドワーク期間中に、学生が主体的にノートをを用いて記録を取る姿をたびたび見る事ができた。

ロサンゼルスでのフィールドワーク

現地調査は二〇一九年七月二五日から三〇日にかけて行われ、三一日にはアメリカを出国、八月一日に帰国した。

●初日 情報収集を行う(七月二五日)

ロサンゼルス到着後の初日は、情報収



観光案内所で収集した路線図など

集を行った。中心部の地下鉄七番街/メトロセンター駅から徒歩五〜六分のところにあるモータールに荷物を預けた後、観光案内所でパンフレットや公共交通路線図を確保し、バスや地下鉄に乗るための一週間有効パスを駅にて購入した。
モータールにチェックイン後、夕方にはコリアタウンのカフェに移動し、現地在住のインドネシア人コンピューター・コンサルタント、ヘンドリック・マカリウエ氏と語らう機会を持った。マカリウエ氏は



マカリウエ氏との語らい

留学生として渡米し、南カリフォルニア大学の博士課程を修了、数年前に起業した。幅広い人脈を持ち、好奇心旺盛で、ロサンゼルスにあらゆるエスニック・コミュニティの事情に通じているほか、日本文化に対する造詣も深く、特に是枝裕和監督の映画について語り出すと止まらないほどの知識の持ち主である。異文化から学ぶ姿勢の必要性をしきりに強調する同氏との会話は、学生にとっても大いに刺激になったことだろう。マカリウエ

う指令を与えた。昼食時には写真に関するプレゼンを行ってもらい、各々が何を新鮮に感じたのかを共有した。

午後にはオルベラ街近くのチャイナタウンを訪れた。チャイナタウンは日本の横浜や神戸をはじめとし、世界各地に見られるエスニックタウンだが、ロサンゼルスのはそれらとともに先述のユニオン駅があった場所に存在しており、駅を建設するたため強制的に移転させられたという異色の歴史を持つ。ここでも学生をグループごと



チャイナタウン

に行動させ、興味深い建物や景色を写真に収めてくるという課題を与えた。ユニークな「場」の生み出す文化に触れ、改めてロサンゼルス多様性を肌で感じる事ができたのではなからうか。

●四日目 日系コミュニティの歴史を知る(七月二十八日)

四日目はリトルトーキョーで一日を過ごし、日系人の歴史に触れた。

全米日系人博物館では、日本語のガイド付きツアーに参加した。明治時代に渡来した移民の歴史に始まり、現地での生活や日系二世の教育、また戦争がもたらした日系社会への影響についてなど、興味の尽きない話題が続き、学生は熱心にメモを取るとともに積極的に質問を投げかけていた。

また、館内に移設された、西海岸の日系人が太平洋戦争中収容されていたバラック小屋に、特に深い感銘を受けたようだ。

午後はリトルトーキョー内をグループごとに探索した。チャレンジャー号爆発

建物に囲まれた広場がある。二〇世紀の初め、もともとダウンタウン発祥の地と言われながらすっかり荒廃してしまったこの一画に、ある白人女性が目をつけて再開発を行い、想像上のメキシコを再現したのである。オルベラ街付近には中国系アメリカ人博物館をはじめとする各種の博物館もあり、ロサンゼルス多様性の歴史を勉強できるスポットにもなっている。この場所で学生をペアにして散策させ、気になった「発見」を写真に収めてくるよ

事故により非業の死を遂げた日系人宇宙飛行士エリソン・オニヅカの記念碑を探したほか、独自の視点で面白いと思った物を写真に収めるなどの活動を行った。

二〇世紀初めには日本人移民のための店や宿が立ち並びエリアだったリトルトーキョーの、観光地化の一側面を観察することができたであろう。

夕方には浄土真宗系の寺である東本願寺ロサンゼルス別院を訪れ、お盆フェスティバルのようすを観察するとともに、



全米日系人博物館にて

●三日目 創られた空間を体感する(七月二十七日)

三日目には、特定目的のために創られたユニークな「町」を探索した。



日本人漁村跡を訪れる



インタビューのようす



学生が撮影・加工した写真(ロサンゼルス郡内の中国系人口推移を米粒によって表現した、中国系アメリカ人博物館内の展示)



オルベラ街

まず、メキシコの街並みを再現したオルベラ街を訪れた。交通の要衝ユニオン駅付近には、メキシコの土産物や古いマーケットが立ち並びほかに、教会や古い



ロサンゼルス最古の家「アピラ・アドービ」内にて

デコ調の建築様式を特色とするロサンゼルス・ランドマークである。ここではグループごとに館内のデータベースを使った学習を行うとともに、図書館内部のようすを観察し、日常空間における「アメリカらしさ」を発見するアクティビティを行った。童話に関するインタラクティブな展示を発見した班もあれば、利用者の人種分布をノートに記録した班もあり、アメリカの教育・文化機関のあり方や公共空間の使われ方について、新た



ブッダボウル。トッピングをカスタマイズできる

な視点を獲得することができたようだ。午後にはダウンタウンから電車で一〇分ほどのところにある、南カリフォルニア大学を訪問した。一八八〇年設立の同大は現在学生数四万七千人ほどであり、私立の総合大学としてはアメリカ西海岸最古である。映画学部がよく知られ、卒業生には『スター・ウォーズ』シリーズを手掛けたことで有名なジョージ・ルーカスがいる。今回の訪問では、東アジア研究センター職員の献身的な協力のもと、日本



夕食にブッダボウルをいただく

や東アジアに興味を持つ南カリフォルニア大学の学生やその知り合いと交流する機会を持つことができた。ここでは「調査」は特に意識せず、学生は同年代の若者と、英語で自然なコミュニケーションを楽しみ、率直な意見交換を行った。夜には、ダウンタウンにあるピュガン料理のチェーン店で夕食を取った。ピュガンとは、肉のみならず動物由来の卵やチーズなども一切口にしない厳格な菜食主義者のことである。現在アメリカでは野菜や穀物、ナッツ類を盛り込んだ井もの「ブッダボウル」が流行しているが、アメリカ食文化の一端に触れるため、この料理に特化したファーストフード店を訪れた。学生の感想は、「おいしかった」「自分はピュガンにはなれないことが分かった」というように二分しており、かなり好みは別れたようだ。しかし、アメリカにしばらく暮らしたことがあっても、好んでピュガン料理にトライした学生はいなかったため、新たなアメリカの側面

祭りに参加している人々へのインタビューを試みた。二〇世紀初頭に建てられた同寺には、日系アメリカ人を初めとするさまざまな人々が祭りを楽しむために集まっていた。事前に質問を細かく考えていかなかったのにも関わらず、学生は臨機応変に聞き取りに取り掛かり、また午前中に全米日系人博物館で得た知識も活かしながら楽しく会話を進めていた。屋台の食べ物や日本の祭りにおけるそれとは違うという発見に驚き、最後には盆



リトルトーキョーの中心地「日本村プラザ」

踊りの輪に加わり、異国の地での少し変わった「日本文化」を体験した。

●五日目 日常の中の異文化体験から遊ぶ（七月二九日）

五日目は、大学や図書館にて観察やコミュニケーションを行い、またアメリカならではの少し変わった食体験をした。午前中は、ロサンゼルス公共図書館を訪れた。一九二〇年代にダウンタウンの中心部に建てられた同図書館は、アール



盆踊りの輪に加わる



南カリフォルニア大学・東アジア研究センターでの交流会を記念して



ロサンゼルス公共図書館前で

を味覚と視覚から体感することができたのではなからうか。

●六日目 映画の都の魅力を体験する (七月三〇日)

現地調査最終日は、老舗の映画製作会社であり、現在では総合エンターテインメント会社としても有数のワーナー・ブラザースが主催するスタジオツアーに参加した。ツアーではガイドの運転するカートに乗り、実際の撮影で使用されたセット



カートに乗りながら映画・テレビドラマのセットを回る

やスタジオを回り、映画やテレビ番組制作現場の裏側に関する説明を聞きながら、ハリウッドの魅力を堪能することができ、一見遊びの要素が強く思われるが、派手なアトラクションがあるわけではなく、英語の解説が聞き取れなければただぼんやりとセットを見て回るだけになってしまうので、実は想像以上に注意力が必要だ。ワーナー・ブラザース作品が好きであれば、トリビア的な知識も得られ楽しいこと受け合いだが、たえそうでなくて



公開収録番組のセットも見学可能だ

もアメリカの代表的なエンターテインメントが作られる過程を知ることができ、満足度の高い内容となっている。ツアーの最後には、有名な作品で用いられた衣装の展示を見たり、特殊効果を用いた撮影を体験したりすることができ、オスカー像を手にと取ることも可能だ。

最終日にはこれ以上の予定は入れず、午後は太平洋を臨むサンタモニカで思い思いに自由時間を過ごした。夕食時には、「リトルオーサカ」の俗称で親しまれる新



スタジオツアーを終えて

興の日本人街、ソートル通りに移動し、美味しい料理に舌鼓を打ちながら、フィールドスタディーの総括を行った。旅の余情と帰国を心待ちにする気持ちが入り混じる、ロサンゼルス最後の夜となった。

●七日目 帰国(七月三二日↓八月一日)

現地調査の全日程を終え、無事帰国の途に就くことができた。出国時の手荷物検査で手間取るちょっとしたハプニングがあったものの、概ね問題なく、学生・教員ともども元気に帰国することができた。

おわりに

二〇一九年度新規科目である「多文化フィールドスタディー(アメリカ)」には、開始前から不安要素があったものの、ふたを開けてみれば想像以上に物事が順調に進み、最後まで誰も大きく健康を損なうことはなく、積極的に調査に挑むことができた。行動の際には学生のアメリカ留学・生活経験が存分に活かさ

れ、教員の管理や手配は最小限に済ませることができた。もちろん取り組み方には個人差もあり、ときには集中力や体力を著しく欠いている場面も見受けられたが、大きな問題などは起こらず、学生の主体性や人間としての成長が感じられる意義深い研修となった。学生の感想のなかで最も多かった声は「楽しかった」というものだが、単なる遊びや旅行に興じたという意味ではなく、自分たちがこれまで知らなかった世界を覗けたことに起因する喜びであろう。

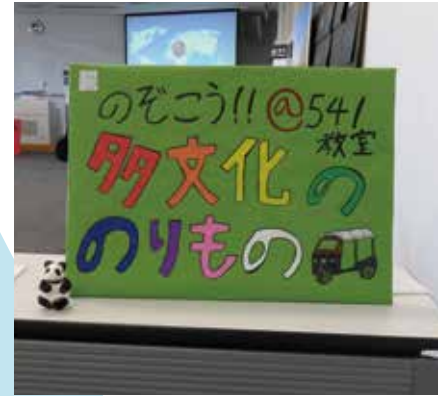
今回のフィールドスタディーが成功した理由の一端には、フィールドノートの活用がある。学生にはどのように使うべきかという指示は与えず、飽くまでも個人が重要と感じたことを書き留めるよう促したのみだったが、折に触れ熱心にメモを取る学生の姿を見ることができた。全米日系人博物館では、展示の説明をしてくれたガイドさんがその熱心な姿に感心し、三〇分もツアー時間を延長してくれた。

一方で、うまくいかないこともあった。クロアチアン・アメリカン・クラブでの移民へのインタビューは今回の調査における目玉プロジェクトの一つであったが、想像以上に相手が英語力や聴力の問題を理由にインタビューストに応じてくれないなど、難しい面もあった。しかし、断られる覚悟で「雑談」を決行した突破力のある学生もおり、また、うまくいかないインタビューも含め、「楽しかった」と前向きに捉える学生もいて、なにかがしかの貴重な学びを得たようだ。

今後のアメリカにおけるフィールドスタディーでは、学生の経験を信じて彼らに任せられる部分を多くするとともに、うまくいかなかった事柄については改善方法や代替案を考えたい。そして、学生と教員との共同作業によって作られる、実り多き現地学習の機会として、さらなる科目内容の充実を図る必要があると考える。



2.韓国コーナー 船団と上陸後、東海道を江戸へ向かう通信使の行列



1.会場入口。どんな乗り物があるかな

第六一回アジア祭が二〇一九年一月一日から三日間にわたって開催された。この秋の一大イベントに多文化コミュニケーション学科は、二〇一四年から毎年展示を通して参加をしてきた。六回目の参加となった今年は、「多文化の乗り物」をテーマとして掲げ、アジア各地とラテンアメリカの文化を乗り物と移動をキーワードとして紹介する内容となった。(写真1)

学部行事報告

2019年度 多文化コミュニケーション学科アジア祭展示
——「多文化の乗り物」

新妻仁一

世界各地の市場を紹介した「多文化まーけっと」で初参加を果たして以来、これまで「フェス（祭礼）」「きっちん（食文化）」「トラベル（観光）」「おうち（住居）」と切り口を変えながら多文化理解と多文化共生問題にアプローチしてきた。今年は、文化の交流とは人の移動に他ならず、乗り物は、多文化交流を支える重要な手段として、時代や地域によって姿を変えながら発展してきたことを伝えようとするものであった。

会場は五号館四階の五四一教室。エレベーターを出て左の入り口から入ると受付、そして左側の壁にそって韓国コーナーが来訪者を迎える。机四台を横に並べたステージ上には江戸時代、將軍の代替わりの際に朝鮮から派遣された外交使節団である朝鮮通信使の行列が展示された。プサンから対馬を経

て大坂まで使節団を運んだ帆船、そして東海道を通って江戸で將軍に献上される国書を運んだ輿を中心に伝統的衣装をまとった使節団の様子が当時の街並みとともに再現された。多くの来訪者が通過する都市名を確認しながら行列に見入っていた。(写真2)

韓国コーナーの横、中東コーナーではイスラム教徒に課された義務の一つであり、多文化交流の要因ともなったメッカ巡礼の紹介とマフマルを背にのせたラクダのキャラバンが展示された。マフマルは、その中に聖典コーランやメッカのカアバ神殿にかけられる黒布を運ぶ輿である。また中央アジアのハラからゴールのメッカを目指す巡礼すごろくも展示され、さいころを振って遊ぶ来訪者の姿も見えた。(写真3)

ラテンアメリカコーナーでは、毎年一月上旬に迎える祝祭日、死者の日に使われるマリーゴールドで飾られた大きな祭壇（オフレンダ）とカラフルな果物

や野菜を積んだ荷車が配置された。また昨年、住居をテーマにした際に作成し、人気を集めた室内の模型とステンドグラスも展示された。(写真4)

会場中央には東南アジアと南アジアのコーナーが準備された。フィリピンの改造自動車ジープニーは、本体はフィリピン製、エンジンは日本製というフィリピンのハロハロ（タカログ語でまぜこぜ）文化を象徴する庶民の足



3.中東コーナー マフマルを運ぶ巡礼キャラバン



8.東南アジアコーナー インドネシアの自動三輪タクシー、バジャイ。乗れますよ

廊下側の壁に沿って高層ビルを背景に展示されていたのは流線型の乗り物。中国コーナーでは、二〇〇四年から商業運行が開始され、上海浦東空港と龍陽路を最高時速四三〇km、約八分で結ぶ最新式のリニア「磁浮」（マグレブ）トレインが展示された。これも乗車可能であり、乗り込んで大きな窓から手を振る来訪者もいた。そしてその横には約二〇〇〇年前の画像石。画像石とは、地下墓の壁面に絵を掘ったもので、そこには古代の馬車が描かれていた。来訪者は、この一角で中国の



4.ラテンアメリカコーナー 野菜を運ぶ荷車、後ろにインドネシアのベチャが見える

である。（写真5）派手な装飾で見る人の度肝を抜くパキスタンのデコトラ（装飾トラック）は、模様で所有者が誰か分かるように、と始まったそうだが、徐々に芸術性を競うようになったらしい。（写真6）タイではトゥクトゥク、インドネシアはバジャイ、どちらも自動三輪タクシー。バンコクやジャカルタの渋滞をもっともせぜず機動性はばつぐん。（写真7）



6.南アジアコーナー パキスタンのデコトラ



5.東南アジアコーナー フィリピンの街角とジープニー

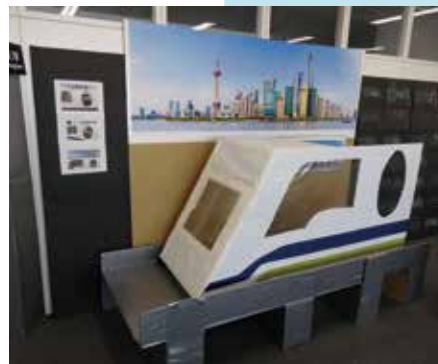
現代と古代に触れることができたであろう。（写真9）

今年も恒例の「名前で多文化」を実施した。アラビア語、韓国語、ヒンディー語の履修生が来訪者の名前をそれぞれの言語の文字で書いて説明するというもので、子供から大人まで、皆この不思議な文字にびっくりした様子であった。中には自分の名前を一文字ずつ確認する人もいた。来訪者とのやりとりを通じて学生が学んでいる言語について、さらに学習意欲を高めることが期待される。（写真10）

近年アジア祭に参加する学生団体が徐々に減少しているという気がかりな現実がある。学科の魅力と学習成果を学内外に発信する場としてアジア祭をどう位置づけしていくのか、今後検討していきたい。



10.名前で多文化コーナー。アラビア語、韓国語、ヒンディー語の文字は不思議な感じがします



9.中国コーナー 時速430Kmのリニア(マグレブ)トレイン。もうすぐ出発です



7.東南アジアコーナー タイの街角とトゥクトゥク

トゥクトゥクにはドアも窓もないそうだが、インドネシアのバジャイは、ドアと窓つき。展示物は、乗客の気分を味わえる作りになっているためドアを開き、座席について記念写真を撮る人も多かった。インドネシアではもう一つ、三輪自転車タクシーのベチャも展示された。現地特有のスクロールにあってもビニールの雨よけがついているので安心だそう。（写真8）

執筆者紹介（五十音順）

新井 敬夫（あらいたかお）

国際関係学部国際関係学科・教授。主な研究分野は、発展途上国の経済分析と開発政策。

今野 裕子（このの ゆうこ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・講師。主な担当科目は、多文化フィールドスタディー（アメリカ）、English for International Studies。

伊藤 裕子（いとう ゆうこ）

国際関係学部国際関係学科・教授。主な研究分野は、国際政治・アメリカ政治外交史。

高山 陽子（たかやま ようこ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な担当科目は、世界遺産論、テーマパーク論。

大塚 直樹（おおつか なおき）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。主な担当科目は、観光地理総論、フィールドワーク入門。

新妻 仁一（にいつま じんいち）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な担当科目は、西アジアの社会と文化、アラビア語。

金 賢貞（きむ ひよんじょん）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・講師。主な担当科目は、文化人類学入門、韓国の社会と文化。

榎 KaYa 国際関係・多文化フォトジャーナル vol.07

2020年 3月31日発行
発行：亜細亜大学国際関係研究所
制作：株式会社キンデル

問い合わせ先
亜細亜大学国際関係学部
〒180-8629 東京都武蔵野市境5-24-10
<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

本雑誌記事の無断転写を禁じます。
©2020 Faculty of International Relations, Asia University